

## 江戸噺本と朝鮮漢文笑話集の比較研究

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の諸文献に見られる笑話や江戸時代の噺本について、その類話を専ら中国の文献に見出そうとしてきた従来の研究に対して、新たに朝鮮における漢文笑話集を視野に入れることで更なる研究の進展が可能であることを、実証的に示そうとしたものである。

朝鮮の漢文笑話集は、近年ようやくその資料的整理がなされたことによって、文学研究に利用できるようになった。本論文では、15世紀から18世紀にかけて書かれた5種の笑話集、『東国滑稽伝』『村談解頤』『禦眠楯』『莫葉志諧』『破睡録』を用い、それらを精読することによって得られた新たな類話の存在を指摘する一方、日本と朝鮮、中国とを繋ぐ文化交渉にも目を向けている。

日本の昔話に「和尚と小僧譚」と総称される類型がある。最新の研究では28タイプに分類されるほど豊かな広がりをもつこれらの話柄のうち、代表的なものが「餅は毒」型であるが、その文献上の初出は鎌倉時代の僧無住の手になる『沙石集』とされ、その派生型と見られる「卵は白茄子」型の話も、同じく無住の『雑談集』に見えている。類話は狂言にも見出され、『醒睡笑』以下の江戸噺本にも多数収められて、中国の文献や朝鮮の民話に全く類話がないわけではないが、日本で独自に発展したかに見える。本論文は、こうした話柄が姜希孟編『村談解頤』(1483年頃成立)にも見えることをまず指摘する。次いで、従来日本と中国の民話や昔話としては知られていても、文献上は応永27年(1420)以前に書かれた後崇光院宸筆『駿牛絵詞』紙背説話断簡に見えるものが唯一とされてきた「和尚の女遊び」型の話について、類話が宋世彬編『禦眠楯』(1530年頃成立)に見えることを指摘する。さらに、従来は日本と朝鮮の民話に見えるのみで、文献上は寛延4年(1751)刊の岡白駒撰『訳準開口新語』に確認できるだけであった「和尚お代わり」型の話についても、類話が洪万宗編『莫葉志諧』(1678年頃成立)に見えることを指摘する。これらはすべて本論文における全く新しい発見であり、今後、日本と中国のみならず、朝鮮をも含めて笑話の発生や伝播を考える上で、看過できない資料群を探り当てたと評価し得る。

また、元和9年(1623)に成った安楽庵策伝作『醒睡笑』に関する考察として、まず明末1611年頃に編まれた馮夢竜撰『笑府』に見える阿呆婿譚との類話について、両者に直接的な関係を認めることには否定的にならざるを得ないとしても、既に1525年に刊行されていた朝鮮の文人成俔による随筆文集『慵齋叢話』中に類話が見出されることを指摘し、該書が後年日本にもたらされた事実にも鑑み、中国あるいは朝鮮からの笑話の移入という視点そのものは、なお有効であるとする。さらに、従来典拠不明とされてきた吝太郎譚について、徐居正編『東国滑稽伝』(1477年頃成立)に類話が見えることを指摘するとともに、策伝がこの話を入手する経路として、該書の序文を書いた姜希孟の五代の子孫である姜沆に注目し、文禄・慶長の役により日本での抑留生活を強いられた姜沆に藤原惺窩との交流があったことから、惺窩の交友圏にいた策伝にも伝わった可能性に言及する。

以上のように、本論文は新発見の資料を駆使して独自の成果を得ていることから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。